第98回全国高校野球選手権 和歌山大会

串本古座 逆転勝ち

田辺工業は延長で力尽く

全国高校野球選手権和歌山大会は15日、第2試合で串本古座が初芝橋本に2―1で逆転勝ちし、4年ぶりに初戦を突破した。第3試合は田辺工業が延長11回の末、6―8で海南に敗れた。

【16日】

(日)第1試合（2回戦）
日高中津7―4日高（延長10回）

【15日】

(日)第2試合（1回戦）

初芝橋本	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
串本古座	0	0	0	0	0	0	0	0	2×	2

〔初〕澤野、前垣内―中川
〔串〕川村―日下▽二塁打＝坂口、北田、中川（初）、川村（串）

串本古座は1回に1点を先制されたが、その後は先発の川村が粘りを見せ、バックも堅い守りでもり立てた。8回、2四球と内野安打でつくった1死満塁の好機に川村が右前適時打を放ち、二塁走者の松本幸大が捕手のタッチをすり抜けて逆転のホームを踏んだ。

串本古座の部員は18人で、3年生の選手は主将の松本幸大と山下の2人だけ。松本幸大は「人生で一番うれしい。（決勝点の走塁は）ミスがあって挟まれたけど、行ってやれという気持ちだった。悔しい思いをしてきた先輩たちや両親に恩返しができた」。真っ黒に日焼けした顔から白い歯がこぼれた。

(日)第3試合（2回戦）

海南	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2
	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2

8
6

田辺工業（延長11回）
〔海〕森、永川―山本〔田〕
大和、田上―栗山▽本塁打＝大和（田）▽三塁打＝小泉、岡川（海）▽二塁打＝平林、岡川2（海）、小田（田）

昨年の和歌山大会ベスト4、田辺工業が初戦で敗退した。

田辺工業の先発投手、大和は毎回ランナーを出す苦しいピッチングが続き、打線も海南の先発投手、森の変化球に苦しんだ。8回に四球で出たランナーをスクイズで返して何とか同点に追い付いたが、10回に海南が疲れの見えた大和をとらえて2点をリード。しかしその裏、2死一塁で大和が同点の本塁打を放ち、試合を振り出しに戻した。

11回、海南が連打を浴びせて4点差に突き放すと、力投の大和は177球で降板。田辺工業もその裏に2点を取って粘りを見せたが力尽きた。

試合後、田辺工業の稲垣友輔監督は「大和以上の投手はいないので、限界までいこうと決めていた。選手たちはよくやってくれた。悔いはない」と語った。

(日)第1試合（1回戦）
新宮5―4和歌山北

(日)17日の予定
第1試合（午前8時半）
那賀―笠田
第2試合（午前11時）
和歌山南陵―智弁和歌山
第3試合（午後1時半）
紀央館―神島
第4試合（午後4時）
耐久―伊都

初芝橋本―串本古座　捕手のタッチをすり抜け生還する串本古座の松本幸大（15日、和歌山市の紀三井寺球場で）

初芝橋本		打	安	点
[右]	須崎	5	2	0
[左]	小山	4	0	0
[遊]	坂口	4	2	0
[一]	北田	2	1	0
[二]	松田	4	1	1
[三]	古賀	2	0	0
[中]	河合	3	0	0
[捕]	中川	4	1	0
[投]	澤野	2	1	0
打	今長	1	0	0
投	前垣内	1	0	0
振	球	犠	併	残
4	4	2	0	10
			32	8	1

串本古座		打	安	点
[中]	山下	3	0	0
[遊]	佐々木	1	0	0
[二]	松本幸大	3	1	0
[一]	長脊	3	0	0
[投]	川村	3	2	2
[捕]	日下	4	1	0
[右]	山本	4	0	0
[左]	下村	4	0	0
[三]	澤井	2	1	0
振	球	犠	併	残
1	6	2	0	9
			27	5	2

投手	回	安	責
澤野	5	2	0
前垣内	3	3	2
川村	9	8	1

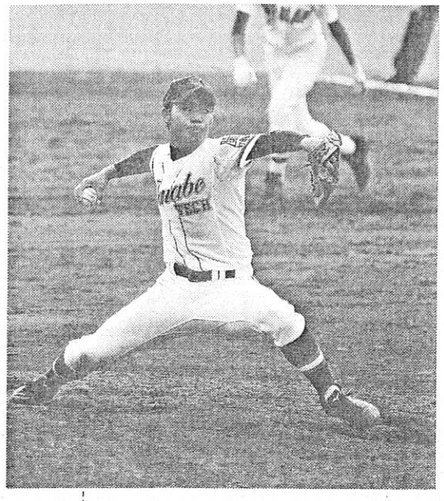
海南		打	安	点
[遊]	平林	5	4	1
[三]	佐々本	3	0	0
[二]	松本	5	1	1
[左]	小泉	5	3	2
[一]	永井	6	1	0
[右]	岡川	5	4	2
右	野田	0	0	0
[中]	吉田	7	1	1
[捕]	山本	5	1	0
[投]	森	2	0	0
打	阪井	1	0	0
投	永川	2	2	0
振	球	犠	併	残
6	9	6	4	20
			46	17	7

田辺工業		打	安	点
[中]	楠本	4	1	0
打	薮本	1	1	1
[二]	柏木	4	1	0
[遊]	田上	5	1	1
[投]	大和	6	1	2
[三]	中尾	5	1	1
[一]	下地	3	0	0
[捕]	栗山	5	0	0
[右]	小田	5	3	0
[左]	楠本	3	1	0
打	山本	1	1	0
振	球	犠	併	残
9	6	1	0	10
			42	11	5

投手	回	安	責
森	7	4	0
永川	4	7	5
大和	10⅔	17	4
田上	1	0	0

白球

田辺工業



打者を背負っても力投するエースの大和幸平

けがと闘った大黒柱

田辺工業のエースで4番、大和幸平（17）は試合の前日、1年先輩の野球部卒業生、那須悠哉と連絡を取り合った。那須は昨年、同校をベスト4まで導いたエース。「お前もできるよ」と励ましてくれた。周りの期待も感じていた。「那須投手のように最後は格好良く終わりたい」と憧れていた。

この日、大和は毎回走者を出すピンチの連続だった。「相手のバッターは打球が速く、打たれると思った。自分の調子が悪かったのではなく、力不足を感じていた」。それでも最後まで投げるのがエース。1、2回に1点ずつ取られたが、その後9回まで無失点に抑えた。味方も6、8回に1点ずつ返し、試合は延長戦に突入した。

10回、2点のリードを許した場面で、大和は4番打者としての重責を果たす。2死から3番田上諒介が出塁。打席が回ってきた。

「打ちたいと思っていた。みんなが一生懸命打席を回してくれた」。高めに浮いたストレート。渾身（こんしん）の一振りでとらえた打球は左翼芝生席へ。起死回生の同点ホームランとなった。

しかし11回、4点を奪われ、マウンドを降りた。その裏、2点を返し、2死三塁の場面で再び打席が回ってきた。「悔いのないスイングを」と心掛けたが、変化球をとらえきれず一塁フライに倒れ、試合が終わった。

この4月、肘の手術をした。5月には復帰したが本来の投球はできなかった。「もっと練習できていれば、落ちていた球威や制球力を上げられたと思う。もっとみんなと野球をやりたかった」。涙がこぼれた。

（敬称略）